



「ひらほく新聞」で検索!

★ホームページ・ひらほくランド★

http://www.hirahoku.com/

☆バックナンバー含む「ひらほく新聞」を閲覧・ダウンロード可能です!

発行所 読売センター平塚北部(ひらほく) 山本 直 〒254-0013 神奈川県平塚市田村9-4-32 電話 0463-54-2807

# 先人の思い 次世代へ語り継ぐ 黒島を忘れない

語り継ぐ責任。戦争の体験はなくとも、できることとして、知っていただきたいことを発信してきた毎年8月。これまであの特攻隊の「知覧」へは二度慰霊訪問しましたが、恥ずかしいながら知覧に近い『黒島』という島の存在、そしてそこで終戦間際に実際にあった出来事について全く知りませんでした。

昨夏、書籍「黒島を忘れない」に出会い、衝撃を受けました。一年越しの今夏、思いを込めてご紹介いたします。

## 太平洋戦争末期、特攻隊員が墜落し、流れ着く島があった

終戦間際の一九四五年(昭和二〇年)春、薩摩半島南部にある知覧や大隈半島の鹿屋、串良の飛行場から、数千人の二十歳前後の若者たちが、爆弾を抱えた飛行機とともに沖繩を目指して飛び立った。自らのいのちと引き換えに、敵艦に特攻するために……。

しかしながら、六人の特攻隊員が、鹿児島から約50キロ南に浮かんだ黒島という小さな島に不時着している。黒島の人たちは、けんめいに介抱した。それによって、いのちを救われた兵士たちもいた。そんな元特攻隊員と、黒島の人たちとの交流は、七〇年が過ぎた現在でも続いている。

老いとともに途絶えていく。きずな。風化される記憶。それでも、あの戦争を語り継ぐうとする人たちがいる。

この冒頭は、書籍「黒島の女たち」特攻隊を語り継ぐこと(城戸久枝著)の帯メッセージからです。城戸さんは、中国残留孤児だった父親の半生を追った『あの戦争から遠く離れて』で、大宅壮一賞を受賞したノンフィクション作家。戦争を体験していない世代が戦争の記憶を語り継ぐことをテーマに取材、執筆活動による発信が続いています。実は、本年6月に横浜で開催された「全国まわしよみ新聞サミット」に参加した折、城戸さんとは「引き寄せの縁」をいただき、ミニコミ8月号で書かせていただきます!とお伝えしていました。

## 始まりは、テレビドキュメンタリー番組

平成一六年八月一五日、フジテレビ系『サ・ノンフィクション』で放送された、『終戦記念スペシャル 黒島を忘れない 59年目の「友よ!」』というテレビドキュメンタリー番組で、演出を担当したのが、小林広司ディレクター。

放送終了後、本来ならばすぐ次の仕事に取りかかるはずが、初めて知った「黒島」のこの作品はそうはさせてくれなかった。

特攻の意味、具体的ではない後味の悪い疑問と、そして強く思い知らされた「伝える」ということの重さ、その使命。

あの八月一五日を境に大切な何かが断ち切られている。政治的、歴史的観点からこれまで以上に検証する、そのことよりも大事な「集団」ではなく個々の気持ち、つまり『人の思い』を知ること。黒島の絆の話を、親たちの世代の「人の思い」を伝えていきたい。何かに取り憑かれたように黒島の記録を執筆し始めた小林さんだが、すでにその体は病気に蝕まれていた。肺ガンで入院、脳に転移、意識が混濁するなかでも消えない黒島への思い。小林広司さんは平成二〇

年一月二五日、自宅にて五一年の生涯を終えた。残された三冊の大学ノートと未完成の原稿。夫の通夜で初めて会った、黒島へ不時着した六人のうちの一人、江名元少尉。

「黒島へ行こう!」。江名さんとの出会いが、全く黒島のことを知らずとしてこなかった奥さん、小林ちえみさんの心を動かす。そして、ドラマティックな出会いが続き、関係者の尽力で原稿が完成。インターネットの応援サイトで出資金が集まり、平成二六年一月二五日、『黒島を忘れない』愛蔵版が出版された。

## 黒島の物語

黒島は、竹島、硫黄島、黒島の有人島等からなる、鹿児島県三島村のひとつ。鹿屋島に訓練も受けていない学徒兵や少年兵が操縦する整備不良の飛行機は、出撃機の飛行ルート上にあった黒島付近の海に墜落。生きて流れ着いた若者たちを軍神と崇め、島の人たちは懸命に救おうとした。飢えに苦しみながらも自分たちの食料を提供し、乙女会の娘たちが輪番制で必死に看護。極限状態と言えるほどまでに減ってしまった物資をも分け合い、助け合いの中で光る優しさ。黒島での戦争と深い愛情の物語。

奇跡的にほぼ無傷で救助された安部少尉は、一刻も早く本土に戻り再出撃し、今度こそ特攻隊員としての使命を果たしたい、先に漂着した重傷の柴田少尉を助けたいと思うが、島には手漕ぎの伝馬船しかないうえ、薩摩半島までの約50キロの海は「魔海」とも呼ばれる非常に危険な潮流。絶対に不可能と思われるなか、安部少尉の見せた凄まじい熱意に心を動かされた、同年二二歳の安永青年がこっそり、「わしが、いくが……」と申し出た。

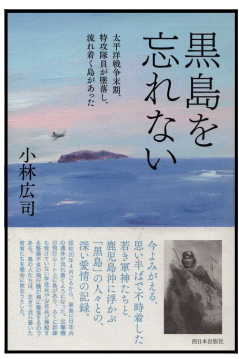
翌朝密かに小さな伝馬船で魔の海へ向け出航。出発を知るものは出征兵士を送る時に必ず歌う『黒島おはら節』で泣きながら見送った。海をよく知る島の男たちは本土にたどり着くことは不可能だと悟った。島じゅうが重い空気に包まれた。ところが……。

安部少尉と安永青年が海に出てから数日が過ぎたある日のこと。ドドドドドド! 耳をつんざくような爆音とともに、黒島上空を一機の飛行機が突如現れた。飛行機は、重傷の柴田少尉が療養する安永家の裏手の畑に向かって何かを落とす、そのまま爆音とともに、南の空へと去って行った。発見された段ボール箱の表面には「柴田少尉殿」と

書かれている。間違いない!これは安部少尉からの荷物だ。なかには、知覧陸軍病院の医師の処方箋と薬、包帯、恩賜のたばこ、さらにチョコレートとキャラメル。別の集落にある学校の校庭にも飛行機があらわれ、キャラメルを落とすていった。二人は生きていた。無事本土に着くことができたのだ!

平成一六年五月一日、黒島に、柴田さんと江名さんが念願としていた「特攻平和観音」が建立され、そして、あの荷物が投下された、まさにその場所に「安部正也大尉慰霊碑」も建てられた。除幕式では、あの日投下されたものと同じ、チョコレートなどが島の子どもたちに贈られた。

当時を知る島民、生き残った元特攻隊員、各々の子息まで、黒島で生まれた「人の思い」を語り継ぐとずっと続いてきた交流。◎書籍の結び「この物語に登場する人たちは、すべて誰かのために何かをする人ばかりだった」



『ああ、黒島へ行きたい!』



# 徳を貫く」と 特攻の母・鳥濱トメ

## 特攻隊員の本当の遺書

もしも、明日で人生が最期を迎えるとしたら、あなたに何を伝えたいですか？

今からおよそ八十年前、鹿児島・知覧に陸軍の飛行学校が開かれました。飛行兵を旨とし厳しい訓練に明け暮れるのは、まだあどけなさの残る十代の少年たち。時は流れ、戦局押し迫ると、ここ知覧から、爆弾を積んだ戦闘機に乗った若者たちが、沖繩へと飛び立っていきました。

知覧から「特攻」（特別攻撃隊）として出撃し、散華した若者の数は四百名を超えます。知覧の特攻平和会館に展示された彼らの遺書には、ふるさとの父母や家族への思いとともに、祖国を守りたいという強い使命感が綴られていて、涙なしでは読めません。

けれども、これらはすべて事前に軍の検閲をパスしたものの、いわば公式の遺書。もちろん遺書に嘘はありません。ただ特攻隊員は「軍神」ですから、死を前にした心模様をありのままに記すことは、許されなかった。せいぜい書いて「お母さん」なんですよね。でも特攻隊員はみな年ごろですから、

好きな女の子だったはず。書いてはいけない、けれど伝えたい思い。そんな禁じられた手紙を彼らは、ある女性に託しました。鳥濱トメ、陸軍の指定食堂だった富屋食堂の女主人です。

「食べたいもの、なんでも作ってあげるよ」  
親元を離れ、片時も気の休まらない日々を過ごす少年たちを、トメは温かく迎え、親身に世話をしました。そんなトメを母と慕い、彼らは最期の手紙を託したのでした。

### 最期の思いを届けたい

彼らが出撃命令を受けたという話は、軍の機密事項が外部に漏れ、スパイ行為と見なされます。見つければ厳罰が科されるでしょう。しかし、トメは「あの子たちの最期の思いだから」と危険を顧みず、手紙を投函し続けました。

戦後、トメは知覧に来る遺族のために、食堂の隣で旅館を始めます。食堂は現在、ホテル館富屋食堂として再現され、彼らが託した手紙の一部を見ることが出来ます。

「特攻平和会館とホテル館富屋食堂、両方の遺書を見てくださいね」

知覧を訪れる人に、私は必ずそうお伝えしています。

### 決して忘れてはいけないこと

昭和二十（一九四五）年八月。知覧飛行場に残った最期の飛行機が燃やされると、トメは落ちていた樅杭を地面に立てました。

その後、知覧町長に再三にわたり働きかけ、旧飛行場の一角に「特攻平和観音堂」の建立を実現します。それからは、観音詣がトメの大切な日課となりました。亡くなる直前には、お孫さんにこう語っていたそうです。「私が行かなくても、知覧を訪れる人みんなが観音堂をお参りするようになった。だから私の使命は終わったんだよ」。

現在、ホテル館富屋食堂の館長を務めていらつしやるトメさんの孫・鳥濱明久さんによると、トメさんは生前、こんな言葉も遺していました。

### 「人には命よりも大事なものがあつた。それは徳を貫くこと」

特攻によって戦局がひっくり返ることなどあり得ないという理解しながらも、生き残った者たちの手で祖国が再建されることを信じ、か

けがえのない命を捧げた青年たち。彼らを支えたトメさんだからこそ、言える言葉なのかもしれないね。

### かねて親交のあつた作家

の石原慎太郎氏が、国務大臣となつて富屋食堂を訪ねた時、トメさんは、おむすびにめざし、ふかし芋を用意したそうです。「これを食べて出撃していったあの子たちのことを忘れてはいけない」というメッセージが込められていました。「徳を貫く」ということをトメさんは、身をもって示してくれたのです。

「人には、命よりも大事なものがあつた」というトメさんの真意を、私は「命に代えてでも守りたいものを持ちなさい」というメッセージと受け止めています。命に代えてでも守りたいものがあれば、人はそのために命を使うのですから、どうでもいいことには無駄死で

きなくなりません。そして他の人たちに對しても、「大切なもののために命を使わせてあげたい」という思いが、自然とわき起こってくるはずなんです。

つまり、命に代えてでも守りたいと思えるぐらい大切なものを持つことが、自分の命も、ひいては他者の命も慈しむことにつながるのです。簡単に人を殺め、命が軽んじられる現代だからこそ、命に代えてでも守

りたいものを持つことの尊さを、私たち大人は、勇気を持って伝える必要があるのではないのでしょうか。

### （終わり）

このお話は、道徳の研究と教育を通じて社会に貢献する公益財団法人「モロロジー研究所」から歴史上の女性の特集を依頼された白駒妃登美さんが連載で書いていたもので、この7月に「なでしこ歴史物語」というタイトルで書籍化された50話のうちの一つです。6月末、都内での出版記念講演会に有難く参加。久しぶりの博多の歴史・白駒節に、たっぷりと感じていただきました。今後、こちらでご紹介できたらと思います。

『人生に迷ったら知覧に行け』という書籍の著者、永松茂久さんは、たこ焼き屋の商売を始める前に、祖父から次のように言われたそうです。

「たぶん、最初は大変だぞ。まあ、始めてみればわかるよ。でもな、もし人生の道に迷ったら鹿児島県の『知覧』に行け。必ず何かが見えてくる。そこにはな、じいちゃんやの仲間たちがいるから、挨拶しておいてくれよ」

その後今では永松さんは、知覧ホテル館富屋食堂の特任館長にも任命され、

毎年春、「知覧フォーユー 研修さくら祭り」を主催しています。

### 白駒妃登美さんも書いていた特攻隊員、大橋茂久さんの遺書が書籍で紹介されています。抜萃します。

「後に続く生き残った青年が、戦争のない平和で、豊かな、世界から尊敬される、立派な、文化国家を再建してくれる事を信じて、茂は、たくましく死んでいきます」

以下、書籍の結びより、僕は、先人の意志を継ぎ、意志を伝えるというタスキをもらった走者の一員になった。「死」があるからこそ、命を使って何かをなしていく大切さに気づくことができる。

一つだけ確実に言えることがある。それは人生の喜びは、自分の命を何かに変えることができるということだ。その何かとは……

- ◎愛する人の幸せのための礎になるということ。
- ◎自分の行動を通して未来の勇気になるということ。
- ◎先人の意志を継ぎ、後世へ意志をつないでいくということ。

先人たちの教えを無駄にするかどうかは、あとに続く僕たちにかかっている。いつの時代も新しい歴史は若者達がつくるのだから。

## 編集後記

先月号でご案内の、ドキュメンタリー映画「みづばちと地球とわたし」東京初上映イベントに参加、映画は一人でも多くの方に知ってもらいたいと感じる素晴らしい内容でした。岩崎監督や配給元の三浦さん他とも再会、ご挨拶でき、最後は、テーマ曲の『おお』を会場全体で「手話」で歌うという最幸に心温まるイベントでした。「みづばちの危機は人類の危機」、映画を通してのみならず、今後もぜひ発信していきたいと思えます。

今月号は、すべて戦争に関する話題になりましたが、テーマは戦争体験者でなくても次代へ「語り継ぐ」責任ということでした。

小学校低学年の時、二年連続で担任をしてくれた先生が、毎年八月の始め、話してくれたのが、長崎の原爆のお話、「八月がくるたびに」でした。深い内容は覚えていませんが、いまだに心に残っています。

八月は一年に一度、スイッチを入れ直す月。亡き父親に代わり、祖父の眠る靖國神社へ参拝します。新たな関連書籍を読む、DVDで「永遠の0」を再鑑賞など、当時の「人の思い」にふれたいと思えます。